# 菊池寛・芥川龍之介は『不思議の国のアリス』をどう訳したか：丸山英観訳, 柳瀬尚紀訳との比較


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2020-11-13<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 夏目, 康子<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6901 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

# 菊池寛・芥川龍之介は『不思議の国のアリス』をどう訳したか——丸山英観訳，柳瀬尚紀訳との比較

夏　目　康　子

## 1　はじめに

イギリスのルイス・キャロルによる『不思議の国のアリス』*Alice's Adventures in Wonderland*（1865）は，日本では，明治時代から大正，昭和，平成に至るまで数多く翻訳されてきた。部分的な訳は試みられていたものの，最初の本格的な全訳は，明治 43 年（1910 年）の丸山英観による『愛ちやんの夢物語』である。明治時代なので，この翻訳では，主人公の Alice が「愛ちやん」，猫の Dinah が「玉」という具合に，多くのものが日本的なものに置き換えられている。

丸山訳の 17 年後の昭和 2 年（1927 年）11 月 18 日に，菊池寛（1888-1948）と芥川龍之介（1892-1927）共訳による『アリス物語』が刊行された。1927 年の 7 月に芥川は死去しているので，最終稿は菊池が責任を負ったことになる。菊池寛は前書きで，「この『アリス物語』と『ピーターパン』とは，芥川龍之介氏の擔任（たんにん）のもので，生前多少手をつけてゐてくれたものを，僕が後を引き受けて，完成したものです。故人の記念のため，これと『ピーターパン』とは共譯と云ふことにして置きました」と述べ，共訳として刊行された経緯を説明している。

『アリス』邦訳史をたどった『表象のアリス』（2015）の著者千森幹子はこの共訳について，おそらく大半は菊池が訳したのではないか，あるいは一部下訳をさせて菊池が最後に手を入れたのではないかと推測している（350）ので，本稿ではこの共訳は菊池訳と表す。明治，大正時代の翻訳作品では，主人公の Alice が「愛ちやん」「綾子さん」「マリコ」「すゞ子ちやん」「あやちやん」「まりちやん」とされた例や，猫の Dinah が「玉」や「ミイヤ」となってしまった例や，Cheshire Cat が「朝鮮猫」や黒い「化猫（ばけねこ）」になってしまった例があるが，菊池の翻訳では，登場人物の名前は，アリス，デイナー，チエシヤー猫など，原作の英語の名前をカタカナで表記したものだった。登場人物の名前の表記では，より原文に近づいた翻訳だと言える。

本稿では，英語から日本語への昭和初期の翻訳において，イギリスの食べ物や事物をどの様な日本語に置き換えているのか，また，英語の言葉遊びを日本語にどう置き換えているのかなど，いくつかポイントを絞って検討し，菊池訳の特質を探る。さらに，明治時代の丸山英観の翻訳との比較，昭和後期の柳瀬尚紀の翻訳との比較を通して，時代による翻訳の違いと変化についても考察する。また，翻訳作品を精査することにより，英語から日本語に翻訳するうえで，ひらがな，カタカナ，漢字という三つの表記法がどのように翻訳に生かされるのかについても考察する。

## 2　菊池寛・芥川龍之介の共訳と，その評価

両者とも作家として有名だが，菊池寛も芥川龍之介も共に英文学科卒である。芥川龍之介は 1916 年に東京帝国大学英文学科を卒業した。菊池寛は京都帝国大学英文科選科を経て，1916 年に本科英文科を卒業した。1914 年，菊池と芥川は，久米正雄らとともに第三次『新思潮』を刊行し，菊池は筆名で戯曲を発表し，芥川はイェーツの短編の翻訳や小説を発表した。その後，菊池は『真珠夫人』（1920）などの小説で人気作家となり，1926 年に文藝春秋社を創設した。

創設の次の年の昭和 2 年（1927 年）11 月 18 日に，興文社・文藝春秋社から，菊池・芥川共訳『アリス物語』が小學生全集第二十八巻として刊行された。子ども向けなので，すべての漢字にルビがふってある。ほとんどはひらがなで漢字の読みを表したものだが，中にはイギリスのものを日本の子どもに理解できるように説明的にカタカナでルビをふっているものもある。

例えば, 硝子に「ガラス」, 煖爐に「ストーブ」, 舞踏に「ダンス」, 豚鼠に「ギニアピッグ」，四組舞踏に「クワドリール」とカタカナでルビをふっている。一方，bottle を「小さな瓶（かめ）」と日本風に訳しているところもある。直訳したのでは当時の日本の子どもにわかりにくいものは，あえて日本のものに置き換えている。特に食べ物の場合が多い。第 1 章の ORANGE MARMALADE は「橙（だいだい）の砂糖漬（さとうづけ）」，cherry tart は「櫻桃（さくらんぼ）の饅頭（まんぢゅう）」，第 11 章にも登場する tart は「お饅頭（まんぢゅう）」と訳されている。洋菓子は昭和初期の子どもにはまだ馴染みが薄かったので, そのまま英語の音でカタカナ表記しても判りにくかったため, 日本の菓子に置き換えたのだろう。

長さや体積や金額を表す単位の場合，当時日本で使われていた単位に置き

換えられるか，漢字に説明的にルビをふっている。アリスの身長の変化を表すとき，インチやフィートが「寸」や「尺」に置き換えられ，長い距離の場合は「哩（マイル）」と表示され，金額には「銭」「厘」が使われている。アリスが涙を流す場面では，体積を表すのに「升（じょう）」という日本の単位が使われている。

英語の言葉遊びを日本語で表すのは難しいが，第 1 章で アリスが空中を落下しながら自問する Do cats eat bats? が いつの間にか Do bats eat cats? (11) に変わる場面の訳は，「猫（キャット）は蝙蝠（バット）を食べるか知ら」と「蝙蝠（バット）は猫（キャット）を食べるか知ら」(15) という具合に，漢字に英語の音を表すカタカナのルビをふり，猫と蝙蝠の音が似ていることに読者の注意を促している。

第 3 章に，同音異義語の tale と tail をアリスが勘違いする場面がある。ネズミとアリスの対話部分 “Mine is a long and a sad tale!” said the Mouse, turning to Alice, and sighing. “It is a long tail, certainly,” said Alice…. (27-28) である。この訳では, カッコを使って（英語で「おはなし」という言葉は「尻尾」という言葉と音が同じに聞こえるのです (63)）と解説を入れている。

第 12 章では，ハートのキングがクイーンに向かって次のように言う場面がある。ここでは，fit が「発作」と「当てはまる」という二つの意味で使われている。“…you never had fits, my dear, I think?” “Never!” said the Queen … “Then the words don’t fit you,” said the King…（106-07，下線筆者）の菊池訳は，「それぢやフイツト（発作）なんかいふ言葉は，お前にはフイツトしない（當てはまらない）しねえ」(248) という具合に，括弧内に意味を入れ，英語の語呂合わせの説明を行なっている。菊池は翻訳者として英語の言葉遊びを訳す際，ルビや括弧内での解説，あるいは括弧を使っての言い換えなどによって，その都度読者に説明してくれる。

そのような工夫が見られる一方，現代ではあまり使われない古風な言葉遣いもある。次は，第 1 章の冒頭である。Alice was beginning to get very tired of sitting by her sister on the bank, and of having nothing to do…. (9) が「アリスは姉様（ねえさま）と一緒に，土手に登ってゐましたが，何にもすることがないので，すつかり厭（あ）き厭（あ）きして来ました」(7) と訳されている。ここではアリスの姉は「姉様（ねえさま）」と地の文で呼ばれている。第 8 章でハートのクイーンが “Off with their heads” や “Off with his head” と言う場面では，「打首（うちくび）」と訳されている。第 3 章ではアリスがネズミに向かって，“You” と呼びかけるが，「お前さん」または「あなた」と訳されている。第 7 章でも三月兎たちに向かっ

てアリスは “You” と呼びかけるが，「お前さん」や「あなた」と訳されている。現代では，7歳の少女が話し相手に「お前さん」と呼びかける場面は想像しにくい。また，第3章ではアリスが「ごめん遊ばせ」とネズミに謝る場面がある。このような丁寧な言葉遣いを7歳の少女がするというのも現代日本では稀である。第8章ではトランプのことを「カルタ」と呼ぶなど，日本のものに置き換えている。

以上のように，訳文の随所に，まだ日本の子どもたちに馴染みが薄いイギリスのものを何とか紹介しよう，言葉遊びの面白さを伝えようという工夫が見られる一方で，依然古い言葉遣いも並存しているところに昭和初期の時代性が表れている。

菊池訳は，『不思議の国のアリス』翻訳史の中でどのように評価されているのだろうか。『アリス』の翻訳史を辿った『翻訳の国の「アリス」』(2001)の楠本君恵は，菊池訳について，さまざまな工夫をしながら言葉遊びの訳に挑戦し，現代の翻訳の原型がここでほぼ完成していると評価している (100)。

詳細に『アリス』邦訳史を分析した千森幹子の『表象のアリス』では，菊池訳を，自然な日本語で現代でも通用する魅力のある作品であり，翻訳も流暢で言葉遊びの訳もかなり工夫が凝らされていると評価する(353)。また，「菊池の『アリス物語』が翻訳のみならず文学作品としても高水準なのは，彼が英語力に堪能であり正確な翻訳を心がけただけではなく，日英の言語的相違と翻訳の困難さ，さらに文学作品としての芸術性を十分に尊重していたからだ」と評している (356)。しかし一方で，“this curious child” の訳語を「この変わり者の子ども」と訳し，“simple sorrows”，“simple joys” を「単純な悲しみ」，「単純な喜び」と訳している例を挙げ，菊池の翻訳は子どもの目線に立った翻訳ではなく，原作の持つアリスの好奇心，強靭さ，積極性や生き生きとしたきらめきを再構築できずに終わったと手厳しい。さらに，それは，菊池が日本の男性原理的な観点からアリスを解釈しなおしたからであり，菊池にとって，アリスは，常に目上の男性の立場から道徳や作法を教え導く，自分の子どもあるいは娘のような存在，将来結婚し家庭生活をいとなむその準備段階にすでに一歩踏み出した未来の女性にすぎないからだと推察している (357-8)。千森は本書で，ジェンダーの観点からも翻訳作品を分析，評価しているため，この点で特に辛口になるようである。

菊池は翻訳者として原文をできるだけ忠実に訳すことに尽力したものの，

1920 年代，昭和初期の日本において，独立心に富む，好奇心溢れるイギリスの一少女の輝きに共感し，理解し，それをうまく伝えることには限界があったのではないだろうか。そもそも，原作が出版された 19 世紀半ばのイギリスにおいても，アリスのように，突然放り込まれた異世界の中で，怒りっぽい動物や反論する大人たちを相手に果敢に一人で道を切り開いていく少女というのは，極めて稀な存在であった。原作の出版から 60 年を経たといっても，まだ家父長制的社会制度が残る戦前の日本に於いては，アリスのような自立した少女というのは，なかなか理解しがたい存在だったと考えられる。現代のジェンダー観からすると菊池のアリス像の理解に限界があるのは，仕方がないことである。翻訳における新たなアリス像が登場するには，矢川澄子などの女性翻訳者や，詩人の北村太郎などを待たなければならないが，それについては別稿に譲る。

## 3　丸山英観訳と柳瀬尚紀訳との比較

柳瀬尚紀は，ジェイムズ・ジョイスの難解な『フィネガンズ・ウェイク』を独自の造語を駆使して翻訳したほか，数々の翻訳作品を生み出している。柳瀬は 1987 年に筑摩書房から『不思議の国のアリス』を出し，その後，1990 年に集英社から『不思議の国のアリス』を出した。いくつか訳語が異なるが，一番大きな違いは，1990 年版は「です，ます」調で子どもを読者対象としており，1987 年版は「だ，である」調で一般向けであるという点である。

本章では，最初の本格的な『不思議の国のアリス』の翻訳である明治時代の 1910 年の丸山英観訳『愛ちやんの夢物語』と，1927 年の菊池･芥川訳『アリス物語』と，その 60 年後にあたる 1987 年の柳瀬訳の『不思議の国のアリス』の三つの翻訳を比較する。次から挙げるのは，原文，丸山訳，菊池訳，柳瀬訳の順である。

まず語彙のレベルから見てみよう。第 1 章に登場する daisy-chain の daisy の丸山訳は「雛菊（ひなぎく）」，菊池訳も「雛菊（ひなぎく）」，柳瀬訳では「デイジー」となる。ORANGE MARMALADE は「橙糖菓（オレンジたうくわ）」「橙の砂糖漬（だいだい　さたうづけ）け」「オレンジマーマレード」であり，mile は「哩（マイル）」「哩（まいる）」「マイル」であり，cherry tart は「櫻實漬（さくらんぼうづけ）」「櫻桃の饅頭（さくらんぼ　まんぢゆう）」「チェリータルト」であり，tart は「栗饅頭（くりまんぢう）」「お饅頭（まんぢゆう）」「パイ」であり，cards は「骨牌（カルタ）」「カルタ」「トランプ」と訳されている。

丸山訳ではルビがふってあるものの，漢字が多く使われている。そのルビも旧仮名遣いである。菊池訳もルビのついた漢字である。だが，柳瀬訳をみると，菊池訳から 60 年の歳月を経て，日本でどれだけイギリスの風物が一般化したのかが明らかになる。丸山訳や菊池訳では漢字で表記，あるいは日本のものに置き換えられていたもののほとんどが，柳瀬訳では英語の音をそのまま表したカタカナ表記でも読者に理解されるようになった。第二次世界大戦を挟んで, 日本は一気に西洋文化を取り入れ, それが日常的なものになった。その受容の仕方も，日本のものに置き換えるのではなく，英語の読みをカタカナで表し，それをそのまま名前として取り入れていったことになる。カタカナ表記であれば外来語であることが一目瞭然であり，かつ単語を音から推測することができる。カタカナ表記であるため，漢字表記よりも新鮮な響きがあり，イギリスらしさも感じられる。翻訳におけるカタカナ表記の活用は，日本語が持つ他言語からの取り入れの柔軟さの特徴がうまく生かされた例である。

次に，英語による言葉遊びの訳語を検討する。第 1 章でアリスが自問する場面の “I wonder if I shall fall right through the earth! How funny it'll seem to come out among the people that walk with their heads downwards! The antipathies, I think—”（11，下線筆者）の訳語である。アリスはこのままうさぎ穴をどんどん落ちていったら，地球の反対側に出てしまうのではないかと心配する。地球の反対側は antipode，そこに住む人のことを antipodes というのだが，アリスは言い間違えて antipathies と言ってしまう。これをどう訳すかだが，丸山は，「私は若しや地球を貫いて一直線に落ちて行くのぢやないかしら！ 逆さになつて歩いてる人間の中へ出て行ったらどんなに可笑いでせう！オー可厭なこと，私は———」(5) と訳し，愛ちやんの言い間違えについては触れず,「オー可厭なこと」とまとめている。Martin Gardner による詳細な注釈書 *The Annotated Alice*（初版 1960）などまだなかった時代だから,「オー可厭なこと」と最後に訳したのは，丸山が antipathies が antipodes の云い間違えであったことに気づかなかった可能性が考えられる。

菊池は「わたし地球を眞直にぬけて落ちるのか知ら。逆立して歩いて居る人たちの間へ, ひよつこり出たら随分面白いだらうな, あれは反對人だわ（アンテイポディーズ對蹠人とまちがへた)」(13) と，アリスが言い間違えたこ

とを説明付きで訳している。反對人にはアンティパシィーズというルビをふり，對蹠人にはアンテイポディーズと併記されているので，読者には音が似た単語をアリスが言い間違えたのだということがわかり，菊池の解説は親切である。

柳瀬訳では「あたし，このまま落っこちて，地球を通り抜けてしまうんじゃないこと！頭を下にして歩いている人たちのなかにひょいと出て行ったりしたら，とってもおかしいじゃない！退席地（たいせきち）って言ったかしら――」(14) という風に，地球の反対という意味は薄れ，新たな言葉を作り出している。本来なら「対蹠地」というべきところを，発音は同じだが間違った言葉の「退席地」になってしまったということを，漢字の間違いで表している。

次は，先ほど少し触れたが，アリスが tale と tail を混同する場面である。“Mine is a long and a sad tale!” said the Mouse, turning to Alice, and sighing. “It is a long tail, certainly,” said Alice, looking down with wonder at the Mouse’s tail: “but why do you call it sad?”（27-28，下線筆者）の訳を見てみよう。丸山は「『私（わたし）のは長（なが）くて其上可哀相（そのうへかあいさう）なの』と云って，鼠（ねずみ）は愛ちやんの方（はう）へ振向（ぶりむ）きながら長太息（ためいき）を吐（つ）きました。『長（なが）いの，さう』と云って愛ちやんは，鼠（ねずみ）の尾（を）を不思議（ふしぎ）さうに眺（なが）めて，『でも，何故可哀相（なぜかあいさう）なの？』」（37）と訳している。この訳では，同音異義語の tale と tail を愛ちやんが混同していることがわからない。丸山は英語の語呂合わせを無視している。

菊池は「『わたしのお話は長い，そして悲しいものなんです。』と鼠はアリスの方を向いて，溜息をつきながら言ひました。『全く長い尾（しっぽ）だわ。』とアリスは，不審さうに，鼠の尻尾（しっぽ）を見て言ひました。『けれどもそれが何故悲しいといふんですか。』（英語で「おはなし」といふ言葉は「尻尾」といふ言葉と音が同じに聞えるのです。）」（62-3）と訳している。括弧内で，tale と tail の発音が同じだということを読者に向かって説明している。

柳瀬は，「『悲しい長いお話でなあ』鼠はいい，アリスを振り向いて溜息をついた。「長い尾は無しですって，あんなに長い尾なのに」アリスは鼠の尻尾を先までしげしげと眺めた。『どうして悲しいなんていうんですか？』」(42) と訳している。tale を「お話」，tail を「尾は無し」と訳し，説明抜きである。「尾は無し」という訳語は，「お話」と発音が似ており，なかなかうまい訳語である。

第 6 章のアリスとチェシャ猫が，豚に変わった赤ん坊について話す場面

“Did you say ‘pig’, or ‘fig’?” said the Cat. “I said ‘pig’,” replied Alice;（59，下線筆者）では，丸山は「『お前は豚と云ったのか，それとも贅肉と云ったのか？』と猫が云ひました。『豚ッて云ったのよ』と愛ちやんは答へて……」（100）と訳している。ここでは「豚」と「贅肉」の日本語での語呂合わせに変えている。

菊池は「『お前はピッグ（豚）といつたのかい，フイツグ（無花果）といつたのかい。』と猫が言ひました」（141）と訳している。英語の音をそのまま表記し，括弧内で意味を示しているので，読者は二つの単語の音が似ていることがわかる。原文を尊重している。

柳瀬はこの部分を「さっきは『豚』といったのかい，『札』といったのかい？」（91）と訳している。「いちじく」から離れて，「豚」と「札」という日本語の語呂合わせに変えている。柳瀬は，原文から離れて，独自の日本語の言葉遊びにする傾向がある。

第 9 章の公爵夫人とアリスの対話部分 “Of course it is,” said the Duchess, who seemed ready to agree to everything that Alice said: “there’s a large mustard-mine near here. And the moral of that is—‘The more there is of mine, the less there is of yours.’”（80，下線筆者）では，同音同綴異義語である「鉱山」という意味の mine と，「私のもの」という意味の mine が使われており，話が混乱して笑いを誘うのだが，それがどう訳されているだろうか。丸山は「此の近所に大きな芥子菜鑛山がある。それで，其れの徳義は――――『私のが多ければ多いだけお前のが少い』」（146）と訳している。単に直訳しており，同音同綴異義語の面白さは伝わっていない。

菊池は「この近くに大きな芥子のマイン（鑛山）があるよ。そしてその訓というふのは――――わたしのものが（Mine を鑛山と，「わたしのもの」といふのと一緒にしたのです。）澤山あればあるほど，あなたのものが益益少なくなる。――――といふのだ」（194）と訳し，括弧内で，同音同綴異義語の言葉遊びについて説明している。

柳瀬訳では「この近くに大きなマスタード鉱山があるわ。つまり格言でいうと――――『鉱山なき者は恒心なし』」（126）という風に意味を変えている。鉱山なき者は恒心なしというのは，原文ともかけ離れており，また，意味がよくわからない。この訳では，原文に同音同綴異義語による混乱の面白みがあったことは失せてしまう。

以上のように，訳者によって訳出は三者三様である。まとめると，英語の上での語呂合わせや言葉遊びを和訳する際に，明治時代の丸山訳は単に直訳するか，英語の言葉遊びを無視している。読者には英語の言葉遊びが行われていることが伝わらない場合がある。菊池訳では，括弧やルビによる注釈や説明が多く，いささか煩雑な感じはするものの，できるだけ原文に忠実に訳し，かつ英語の言葉遊びについて解説も加えている。柳瀬訳は訳出の上で，英語の言葉遊びを日本語での言葉遊びにしようと工夫しているが，言い換えれば，原文の意味を変え，原文から離れている。柳瀬訳は『不思議の国のアリス』を使っての翻案となっていることがある。柳瀬流では，時には面白い日本語の言葉遊びが生み出されることがあるかもしれないが，原文からあまりに離れ，意味不明，あるいは意味が変わってしまうこともあり，この場合は翻訳より創作に近づいているのではないだろうか。

## 4　翻訳におけるカタカナ表記と漢字のルビ

次に，翻訳文におけるカタカナ表記を検討する。丸山訳でのカタカナ表記のものは，ニューズィーランド，オーストレリア，カスタード，トッフィー，ドード鳥，ローリー鳥，カンタベリー，エドウィン，ウィリアムという具合に，地名，人名，菓子や鳥の名前などである。ただし，菓子の場合，括弧でカスタードやトッフィーについては，それぞれ「牛乳（ぎうにう）と鶏卵（たまご）とに砂糖（さたう）を入（い）れて製（せい）したるもの」「砂糖（さたう）と牛酪（バター）で製（せい）して固（かた）く燔（や）いた菓子（くわし）」(11) などの説明が入っている。そもそも主人公の Alice が愛ちやんであり，Cheshire Cat は朝鮮猫（てうせんねこ）と訳されているので，カタカナ表記が少ない。しかし，丸山訳では，漢字のルビとしてカタカナが活躍している。衣嚢（ポケット），洋宅（テーブル），耶蘇降誕祭（クリスマス），山羊仔皮（キッド），肉汁（スープ），牛酪（バター）など，英語の漢字への置き換え方がなかなか興味深い。現代ではあまり見ない漢字用語だが，明治時代らしく，どれも説明的な漢字使用法である。地名も倫敦（ロンドン），巴里（パリー），羅馬（ローマ）など，漢字にカタカナルビで表されている。

菊池訳でカタカナ表記のものは，アリス，チエシヤー猫，ジヤツクなどの登場人物の名前，およびスープ，アーチ，テーブルなど，当時でも一般的だった語彙である。丸山訳では漢字だったスープ，テーブルがここではカタカナで表記されている。明治から昭和に変わる間に，日本人の生活の中にスープやテーブルは馴染んできたことがわかる。

柳瀬訳では，人物名，地名，食べ物の名前の他に，ティーカップやソース

鍋などの用具名，クローケーなどスポーツ名，ノックなどの動作を表す言葉でカタカナ表記が増えている。

丸山訳と菊池訳と柳瀬訳を比較すると，一目瞭然だが，もっとも大きな違いの一つは，事物の漢字表記が次第にカタカナ表記に変わっていったことである。明治，大正，昭和という時代の中で，英国の事物は漢字表記からカタカナ表記へと軽やかに変身を遂げた。昭和後期にはカタカナだけで表記しても一般読者に理解されるようになったからだが，それには，イギリスの風物をなんとか日本の子どもたちに紹介しようと試みた初期の翻訳作品の果たした役割も見逃せない。英語の音をそのまま表すことができるカタカナ表記，およびルビつき漢字というのは，音を表したり，事物の説明を付与したり，異文化の事物を伝えるのに便利な手段である。

以上のように，外国語から日本語への翻訳では，固有名詞や一般名詞の訳からはじまり，言葉遊びの訳に至るまで，訳者の工夫次第で，漢字，ひらがな，カタカナの三種の表記法をうまく活用することができ，そしてそこがまた訳者の力量が発揮される場でもある。

日本における『不思議の国のアリス』の翻訳史の上では，菊池訳の 2 年後，1929 年（昭和 4 年）に岩崎民平による英日対訳注釈本『不思議國のアリス』が研究社から刊行され，その後の翻訳作品に大きな影響を与えた。影響を受け，ほとんど岩崎民平訳と変わらない翻訳本も出ている。だが，その後昭和 10 年代に日本は太平洋戦争，第二次世界大戦へと突入し，英語は敵国語だったために英語圏作品の翻訳は下火となる。翻訳作品の出版が再び盛んになるのは戦後である。終戦直後は紙不足などもあったため出版数が限られたが，翻訳数が増えるのは 1970 年代からである。その点からも，菊池・芥川訳は，明治･大正期と，昭和後期以降とを結ぶ，昭和初期の貴重な翻訳作品である。

菊池訳には，昭和初期の子ども達にイギリスの風物を紹介しようという意気込みとともに，説明や解説を入れながら，英語での言葉遊びや地口の面白さを何とか日本語でも伝えようという工夫が見られ，原文をなるべく尊重しようという気概が伝わってくる。この点が，自分独自の言葉遊びに変えてしまう柳瀬尚紀の翻訳とは大きく異なる。菊池訳には，日本語の言葉遊びを新しく作り出して置き換えてしまうのではなく，何とか原文のこだわり，いわば英語の面白さを伝えようという工夫がある。その際，訳者には，ひらがな，カタカナ，漢字の三種の文字を使い分け，かつルビを使いこなす手腕が問わ

れる。

最後に，菊池訳の復刻版について述べる。平成時代の 2014 年に，この菊池・芥川訳はパール文庫から復刻版として刊行された。パール文庫というのは，真珠書院によって 2013 年に発刊されたシリーズである。「昔の本だからと言って，古臭くない。かえって新鮮な感じさえするし，いまとは違う考え方が面白い」という江藤茂博の刊行のことばが添えられている。復刻された物語には，菊池訳につけられた平澤文吉による挿絵ではなく，現代のイラストレーターの挿絵が添えられている。

パール文庫の『アリス物語』の表紙と挿絵を手がけたイラストレーターは，喜一という代々木アニメーション学院イラストコンテスト入賞者である。しかし本文は古いままなので，挿絵，装丁と本文との間にどうしても違和感が残る。ライトノベルの様な漫画風の挿絵と，古風な文体との組み合わせに対するちぐはぐ感は拭えない。パール文庫の『アリス物語』は，数多い『アリス』翻訳本の中でも異色の部類に属する。しかし，漫画風イラストに惹かれてこの物語を手に取る現代の若者がいるとすれば，それはそれで，新しい時代に向けた戦略と言えるのかもしれない。

## 使用テキスト

Carroll, Lewis. 1865. *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass*. Penguin Classics, 1998.

キャロル，ルイス著，菊池寛・芥川龍之介共訳『アリス物語』興文社・文藝春秋社，1927 年。

キャロル, ルイス著, 菊池寛・芥川龍之介共訳『アリス物語』パール文庫, 真珠書院, 2014 年。

キャロル，ルイス著，丸山英観訳『愛ちやんの夢物語』，千森幹子編『不思議の国のアリス―明治・大正・昭和初期邦訳本復刻集成 1』エディション・シナプス，2009 年。

キャロル，ルイス著，柳瀬尚紀訳『不思議の国のアリス』筑摩書房，1987 年。

## 引用文献

楠本君恵『翻訳の国の「アリス」―ルイス・キャロル翻訳史・翻訳論』未知谷, 2001 年。

千森幹子『表象のアリス』法政大学出版局，2015 年。